

うなづき湖に架かる謎の吊り橋 その正体を探る！

〔取材現場〕 国土交通省 北陸地方整備局 黒部河川事務所 宇奈月ダム管理所

〔取材協力者〕 柳川 磨彦氏（国土交通省 北陸地方整備局 黒部河川事務所 宇奈月ダム管理所）

連載第4回となる今回は、「うなづき湖に架かる吊り橋」（写真1）に焦点を当て、これがなぜ建設されたのか、その謎を解き明かします。吊り橋について、国土交通省管轄の宇奈月ダム管理所へ取材を行い、構造物が建設された目的やその特徴についてお話を伺いました。その結果、この構造物は、かなり希有な存在であることがわかりました。

——「うなづき湖に架かる吊り橋」とは？

この橋は、富山県の北東部に位置する、黒部市宇奈月町の宇奈月ダム近くにあります。橋は、宇奈月ダムの建設に伴って誕生したうなづき湖に架かっており、黒部川沿いを走行している黒部峡谷鉄道の宇奈月―黒薙間にてトロッコからみることが出来ます。橋はワイヤーロープと鋼製のステップでできており、延長は137m、歩廊部の幅員は1・0m、ステップのパンが0・3mの構造物で、手すりもなく、人が歩くことはできません。では、なぜこの橋は架けられたのでしょうか。

——どうしてこのような構造物が建設されたのですか。

吊り橋の建設当時、橋周辺は図1のようになっています。2001年に

宇奈月ダムが建設

されたことをき

かけに、今回取り

上げた吊り橋が建

設されることにな

りました。

1978年から

取り付けの道路工

事が開始された宇

奈月ダムは、約20

年もの長期にわたり工事が進められ

ました。1990年頃には、骨材採取、

河道付替やコンクリート製造設備の

設置等により、河原全体が裸地となり

ました。ダムの建設工事が進むと、水

量が増加し、対岸へ渡るには、船を使

うか、もしくは送電線鉄塔管理や温泉

引湯管の管理のために架けられた橋

を通らなくてはならなくなりました。

しかしながら、それらの橋は老朽化



写真1 うなづき湖の吊り橋

し、ダム管理上の障害になるという理由で撤去または移設されてしまいました。そのため、人や動物は両岸を自由に行き来することが難しくなりました。

これとほぼ同時期に、宇奈月ダム近くにある人里の畑にて、農作物の被害が多くみられるようになりました。時間が経過するとともに、農作物の被害は拡大していきました。この原因を調

査すると、ニホンザルの群れが農作物を荒らしていることがわかりました。そもそも昔から宇奈月周辺は、猿のエサとなる実が成るアキグミ林が生育し、水生昆虫や淡水生の貝なども多くいたため、猿が採食して利用しており、多くの猿が生息していました。しかしながら、宇奈月ダムの建設により兩岸を行き来できなくなることに加え、湛水に伴ったアキグミ林の消失をうけ、猿は移動ルートと採食地を失ってしまいました。その結果、宇奈月ダム周辺に生息していた群れは行動域

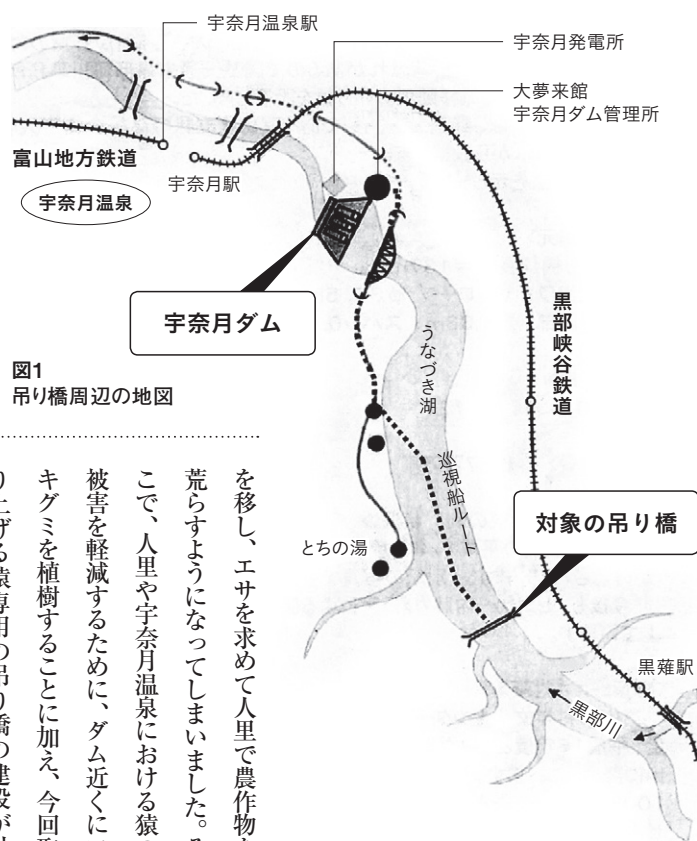


図1 吊り橋周辺の地図

を移し、エサを求めて人里で農作物を荒らすようになってしまいました。そこで、人里や宇奈月温泉における猿の被害を軽減するために、ダム近くにアキグミを植樹することに加え、今回取り上げる猿専用の吊り橋の建設が計画されたのです。

——吊り橋はなぜ現在の場所に選定されたのでしょうか。

この吊り橋の近くには、元々電力会社の吊り橋があり、河川流域に生息している猿の移動ルートとなっていました。猿はその橋を渡り、対岸へ移動していました。猿の行動域をダム湖出現前の状態に近づけるには、昔から猿が移動に使っていた吊り橋のあった箇所近くに、猿専用の吊り橋を設置することが有効であるということになりました。



写真2 猿が渡る様子

——実際、吊り橋の建設によりどれくらいの効果がありましたか。

吊り橋は、2003年10月に工事を開始し、2004年12月に完成しました。橋の建設以降、橋を渡る猿がどれほどいるのかを確認するため、現地にカメラを設置して定期的に調査しています。その調査にて、多くの猿が吊り橋を渡っている姿が目撃されています（写真2）。吊り橋設置直後の2005年2月3日～3月18日間のうち、5日間で32匹、2月18日には一度に20匹の猿の移動が確認されました。また、ある猿の群れは、宇奈月ダム完成前後、人里で農作物を荒らすことがしばしばありましたが、橋の完成後はダム周辺でも存在を確認でき、再びダム周辺に行動域を戻したと考え

られ、橋を整備した効果はあったといえます。2年ほど同じ調査した後、現在は5～6年おきをめどにカメラを設置し、橋の整備効果の検証をしています。

取材を終えて…

今回の対象物は、宇奈月ダムの完成に伴う「うなづき湖」の出現により、対岸へ移動できなくなった猿のために建設された「猿専用の吊り橋」でした。ダム建設という土木事業による生態系への影響の対策として建設された「猿専用の吊り橋」は、周辺の人里への被害を軽減するだけでなく土木構造物と生物との共存という観点から、大変重要な存在であることがわかりました。今回のように、その目的を把握することが一見難しい構造物であっても、影ながら生活を支えていることを知り、改めて土木構造物の魅力を感じました。

（担当編集委員…渡邊雅大、藤原茜）